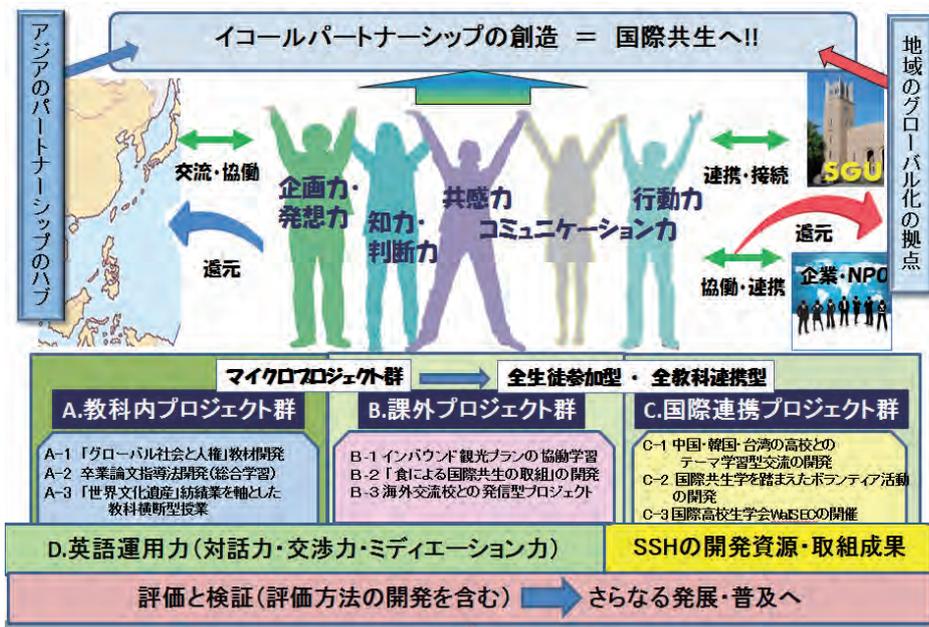


早稲田大学本庄高等学院

国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム ～チームで取り組む「マイクロプロジェクト」を通じた交流・協働・連携・還元～

【構想の概要】

国際共生を推進するために、国内外のパートナーを尊重しながら生徒が主体的にプロジェクトを企画し運営する力を養成する。授業、論文作成指導、国内外交流校とのテーマ型学習推進、発展的・先進的な課外活動など、学校生活のあらゆる機会に少人数での学習活動「マイクロプロジェクト」を組み込み、全校生徒が当事者意識を持って課題に取り組めるプログラムを開発する。



教育課程 赤枠: 研究・討論・発表スキル学習 青枠: 教科横断型展開含む

教科	1年	2年	3年
国語	国語総合④	現代文B② 古典B②	現代文B③
地理歴史	世界史B②	世界史B② 日本史A②	地理A②
公民	倫理②	政治・経済②	
数学	数学I③ 数学A②	数学B③	
理科	物理基礎② 生物基礎②	化学基礎② 化学①	地学基礎②
保健体育	体育③ 保健①	体育② 保健①	体育②
芸術	音楽I・美術I②※1		
外国語	コミュニケーション英語I③ 英語表現I②	コミュニケーション英語II④ 英語表現II②	コミュニケーション英語III④ 英語表現II②
家庭	家庭基礎②		
情報	情報の科学①	情報の科学①	
総合的な学習の時間			総合的な学習の時間②
選択科目		文系 古典講読② 数学II(文系)③ 理系 数学II(理系)③ 物理① 科学課題研究①	一右欄参照
特別活動	HR①	HR①	HR①
単位合計	計32単位	計32単位	計32単位

※1.音楽I・美術Iから1科目選択

3年次選択科目 (2019年度)

選択科目の内容は、学部・学科の専門への接続をはかるものや教科横断的なものなど多岐にわたります。

必修選択科目(文系)	必修選択科目(理系)
古典B②	数学Ⅲα③
政治経済②	数学Ⅲβ③
近現代の世界②	Academic English② (一部講座は上級)
人文社会科学特論②	物理④
数学Ⅲ③、又は 国語総合(日本語総合)②	化学②
自由選択(文系・理系共通科目、学際的科目)②	
2018年度実績例・批評を読む、和歌を読む、早稲田大学と文学、地理学演習、幾何学入門、生物・地学・農業と環境、ア・カベラ、合唱、絵画、美術、スペイン語入門、中国語入門、朝鮮語入門、フランス語入門、英語学術発表基礎、食文化、多変量データ分析入門	

3年次総合的な学習の時間(教科横断的学習)

- 課題探究
卒業論文作成指導、及び、修学旅行事前学習
- 「大久保山学」
本庄キャンパス(大久保山)を「教材」にした学習
大久保山で「変化を捉える」(数学・理学・工学・農学系)
大久保山と生活科学(理学・工学系)
大久保山と地球環境(英語・人文科学系)
大久保山に生活する人たちが、どんな人? (情報・理学・工学・農学系)
大久保山の植生と森林生態学(理学・工学・農学系)
不確実性下における意思決定入門(数学・理学・工学・農学系)
「平家物語」からみる武蔵武士(国語・人文科学系)
本市周辺の文学(国語、人文科学系)

授業での展開と卒業論文での学びの統合

早稲田大学の各学部にも内部進学をさせる本学院では従来から全生徒に学際的な知の鍛錬を行い、ゼミ方式の発表や討論および実地研修の機会を設け、2年後半から1年以上かけて約2万字の「卒業論文」執筆を通して、生徒個々が問いを立て探求をする教育を実施している。SGH 指定を契機に、評価ガイドラインを全教科で統一し、また早稲田大学 Global Education Center(GEC) のアカデミックライティングセンターの支援も得て、論文作成法の3年生一斉指導を実施した。

1年次と2年次は「情報の科学」が「総合的な学習の時間」の役割を担い、問いの立て方・データの読み方、効果的な発表（スライドおよびポスター）の基礎を学ぶ。また、国語・理科・英語で口頭発表やレポート執筆の基礎を学ぶ。教科横断型授業の展開は、国語と世界史、政治・経済と英語、家庭基礎と英語、情報と英語で授業実践が続いている。3年次は「総合的な学習の時間」の1単位を卒業論文一斉指導に充て、3学年担任団と「進路指導委員会」（構成員は複数教科）とで大学生に求めるのと同様なスタイルの学術論文の執筆に向けて課題探求指導を行っている。

優秀な論文を執筆した3年生は年度末に2年生全員対象の「卒業論文報告会」で成果および執筆過程を発表し、後輩の指導にあたる。また、論文作成指導では慶應湘南藤沢高等部との連携も継続している。2017年度はSGH「研究課題」の学内・学外対象の成果報告会をポスター発表形式でも実施し、1、2年生が「ポスターセッション」を参観した。ポスターセッションは通常授業にも取り入れられ、発表と議論の技術として定着しつつある。

“WaISEC” 開催と生徒による運営

SGH 事業が全校生徒が関わり、本学院が国内外交流校および地域の「学びのハブ」としての役割を務めることを目的として、「アジア一人と人、人と自然の共生」をテーマにした高校生国際学会 WaISEC を2018年11月15日～18日に開催し、会期前・会期中・会期後の約半年の学びのプロセスに、ゲスト校生徒も本学院生徒も関わる国際高校生学会の実践例を示すことができた。また、生徒の変

化としては、深いディスカッションをする機会に手を挙げたり、有識者も交えた討論の機会の希望が増えるなど、知的なチャレンジへの志向をする生徒が増えていることが観察できた。

2016年度のプレ大会を含めた実践経験から、国際高校生学術交流を行う際は、以下のポイントを押さえることを提唱したい。

- ・ 明瞭な学習テーマとリサーチクエスションの方向性のある程度教師側で示す方が、焦点が拡散しない。
- ・ 交流学習プログラムのゴールとプロセスを、相手校メンバーと十分共有する。
- ・ 関わる生徒と好ましい人間関係を作るため、「遊び」の時間もプログラム内に確保する。

4年間の検証から

SGH 事業では年度末の効果検証として、「定点調査」で留学への関心や「国際的志向性」の変化を追っているが、SGH 指定期間に在学した生徒は留学への関心が他の学年より高いこと、SGH 指定期間に在学した生徒は「国際的志向性」および「世界の諸問題への関心」が比較的高いこと、短時間であっても留学生や海外の学生と接触する機会を持つことが、上記の志向性にプラスとして働くことが推測できる。

また、WaISEC 運営チームの事後の聞き取り調査からは、負荷の高い探究学習や他校・他組織も関わる運営を生徒が担って進める場合、教師側は、たとえ細かく指導はしなくても、必要なときはいつでも助言をする姿勢、また課題への取り組みを細かいステップに分けるための支援など、生徒に見守りを感じさせる寄り添いが必要だということもわかってきた。

